太平記「阿新殿の事」中の船戻傳說に就いて

飯田豐

「檀風」の謠曲の出典に就いては、誰でも太平記卷二「阿新殿の事」を思ひ浮べるであらう。そして謠曲「檀風」は確かにこれを參考して居ると言はれて居る。併し「阿新殿の事」の中にある船戻しの物語は、太平記の作者小嶋法師の頭から作り出されたものであらうか。

一體日本文學の主流が各時代によつて、種々の形式に變化して行くといふ事も、見方によつては肯定し得ないことではない。けれども、日本文學の流れは數多有つて、互に並行して流れ、國民思想なる地勢の高低によつて支配され、又これを支配するものと見る方が妥當ではなからうかと思ふ。その地勢の高低の境界線は必ずしも直線を描くものではなく、種々なる曲線を描いて居るものである。

それ故に異種文學間にも、往々、その構想上共通のものゝ存在することを認め得られるのである。一例を擧げれば、大鏡、五十九代の宇多天皇の御事を記した條に、

この御門、いまだ位に卽かせ給はざりける時、十一月廿餘日の程に、賀茂の御社の邊に、鷹つかひ遊びありきけるに、賀茂の明神託宣し給ひけるやう、「この邊に侍るおきなどもなり。春は祭多く侍り。冬のいみじくつれ〴〵なるに、祭り給はらむ」と申し給へば、その時に、賀茂の明神の仰せらるゝと覺えさせ給ひて、「おのれは、力及び候はず。おほやけに申させ給ふべき事にこそ候ふなれ」と申させ給へば、「力及ばせ給ひぬべきなればこそ申せ。いたくきやうぎやうなる振舞なせさせ給ひそ。さ申すやうあり。近くなり侍り」とて、かいけつやうに失せ給ひぬ云々

の一節を讀む毎に、自分は、能の前仕手の部分に往々見る構想が早く、平安朝時代の他種の文學にも存したものであると信ずるのである。又同時に曾て國民に興味を與へた一つの傳説が異種文學間に種々なる形に於てあらはれることも認め得る。

扨て、船戻しの物語は、小島法師が、この「阿新殿の事」を書く場合に、國民に曾つて興味を與へた、船戻しの物語を、太平記の筋を面白くする爲に書き加へて來たのではなからうかと思ふ。多くの過去に於ける、國民に興味を與へた多くの物語、傳説等を一つに合せて一篇の小説、戲曲とすることについては、幾多の例を擧げることが出來る。けれども自分は、それをこの稿の終りに、現在に於ては廢曲となつて居る謠曲「船戻」と言つて矢張り、この船戻しの物語をとり入れて居る曲に就いて、説明して見たいと思ふ。

先づ太平記にも檀風にも取入れられて居る船を山伏が祈り戻す物語が、もつと昔からあつたかどうかといふと、宇治拾遺物語卷第三に昔の話として「山伏舟祈返事」といふ話が載せてある。今、太平記や檀風の詞章と比較するためにこの物語を掲げて見ると、

（山伏船祈返事）

これも今は昔、越前の國かぶらぎのわたりといふ所に渡りせむとてものども集りたるに、山伏あり。けいたう房といふ僧なりけり。熊野、御嶽は言ふに及ばず、白山、伯耆の大山、出雲の鰐淵、大方修行し殘したる所なかりけり。それにこのかぶらぎの渡りに行きて渡らむとするに、渡りせむとするもの雲霞の如し。各物を取りて渡す。このけいたう房「渡せ」といふに、渡守耳にも入れず漕ぎ出す。その時にけいたう房齒をくひ合せて念珠をもみちぎる。この渡守見かへりて、をこの事と思ひたる氣色にて三四丁ばかり行くを、けいたう房見遣りて、足を砂子に脛の半ばかり蹈み入りて目も赤く睨みなして、念珠を碎けねともみちぎりて「召し返せ、召し返せ」と叫ぶ。猶行き過ぐる時に、けいたう房、袈裟と念珠とを取り合せて汀近くあゆみ寄りて護す。「召し返せ。召しかへさずばながく三寶と別れ奉らむ」と叫びて、この袈裟を海に投げ入れむとす。それを見てこの集ひ居たる者ども色を失ひ立てり。かく言ふ程に風も吹かぬにこの行く船こなたへより行く。それを見てけいたう房「よりめるはよりめるは、早ういでおはせいでおはせ」とすはなちして、見るもの色をたがへり。かくいふ程に一町がうちに寄り來り。その時けいたう房、「さて今はうち返せうち返せ」と叫ぶ。その時集ひて見るものども一聲「むさうの申しやうかな。ゆゝしき罪にも候ふ。さておはしませおはしませ」といふ時、けいたう房今少し氣色かはりて「はやうち返し給へ」と叫ぶ時に、この渡船に乘りたる者つぶりとなげ返しぬ。その時けいたう房汗を押しのごひて「あないたのやつばらや、まだしらぬか」といひて立ち歸りにけり。世末な

れども三寶おはしましけりとなむ。

とある。この叙述は極めて簡古である。そして只山伏のけいたう房といふのが自分が船に乘ることをことわられて船を祈り返したといふだけの筋である。

これと同じ話が太平記の方では、阿新の傳説の一部とされて叙述も巧みになり、また佛語なども多く用ひてある。

（前略）　折節湊の内に船一艘もなかりけり。如何せんと求むる所に、遙かなる澳に乘浮べたる大船、順風になりぬと喜びて、檣を立て蓬をまく。山臥手を上げて、其船是へ寄せてたび給へ、便船申さんと呼はりけれども、曾て耳にも入れず、船人聲を帆に上げて、湊の外に漕ぎ出す。山臥大きに腹を立てゝ、柿の衣の露を結びて肩にかけ澳行く船に立ち向ひて、いらたか誦珠をさら〳〵と押揉みて、一持祕密咒、生々而加護、奉仕修行者。猶豫薄伽梵と言へり、況や多年の勤行に於てをや。明王の木誓あやまらずば、權現金剛童子、天龍夜叉八大龍王、其船此方へ漕ぎ返してたばせ給へと、跳上り、跳上り肝膽を碎きてぞ祈りける。行者の祈り神に通じて、明王擁護やしたまひけん、澳の方より俄かに惡風吹き來りて、此船忽に覆らんとしける間、船人どもあはてゝ、山臥の御房。先づ我等を御助け候へと手を合はせ、膝をかゞめ、手々に船を漕ぎもどす。汀近くなりければ、船頭船より飛び下りて、兒を肩にのせ山臥の手を引き、屋形の内に入りたれば、風は又もとの如く直りて船は湊に出でにける（後略）

謠曲檀風も、太平記の「阿新殿の事」を參考としたものであると言はれて居ることは前述した通りであるが、この兩者の間に少しづゝの異つた所はある。これは作者世阿彌が、この曲を作るときに能として相應しく、また都合よく變へたものとも思はれる。

太平記の方では、阿新といふ名で出て居るが、檀風の方では梅若となつて居る。父日野中納言資朝も、檀風では壬生大納言資朝となつて居る。また太平記の方には、阿新に便誼を與へる人々は、第一に供をして佐渡に渡り、資朝の遺骨を持つたあの仲間と、阿新が佐渡の本間の舘の中門に佇んで居た時に、阿新の身の上を聞いて本間に取次いだ僧と、資朝の遺骨を拾つて吳れた僧と、本間三郎を討つて後、湊の方に逃れた阿新の身の上を哀れと思つて例の祈りをする山伏と四人になつて居るけれども、謠曲檀風の方では始めから終りまで今熊野梛の木坊の帥の阿闍梨といふものがついて居て梅若を守護し、例の祈りをするのもこの阿闍梨である。また筋に於ても、太平記の方では本間山城入道のはからひで、資朝父子の對面を許さなかつたやうになつて居るが、檀風の方では、資朝が梅若の身に害の及ぶことを慮つて對面しなかつたやうになつて居る。こゝは同じ世阿彌の作の「春榮」などと類似した筋で、世阿彌が好んで用ひた筆法である。又、太平記では、山城入道父子と本間三郎の名が見えて居るが、檀風の方では本間三郎と、狂言の從者が出る。仕手は前仕手が資朝で、後仕手では不動明王、それに連の船頭である。

偖て謠曲の方では船を祈り戻す所の詞章は、

船頭「此程風を待候所に、日本一の追手が吹き候程に、船を出さばやと存じ候。

ワキ「はや拔群に來りて候、又あれに船の見えて候、此船に便船を乞ひ候ふべし、なう〳〵あれなる船に便船申さう。

船頭詞「御覽候へ、此船は柱を立て帆を引くばかりの船にて候程に、未だ出でぬ船に仰せ候へ。

太平記阿新殿の事中の船戻傳説に就いて　（飯田　豐）

ワキ「陸にて人を討つて跡より追手かゝるものにて候へば、ひらにのせて給はり候へ。

船頭「いやいや左様の科人ならば、猶此船は叶ひ候まじ。

ワキ「よし科人は此客僧、客僧を乘せずとも、此兒ひとり乘せて給べ。

船頭「いや兒も法師も知らぬとてなほ此船を押して行く。

ワキ「其船よせずば悔しき事有らうずるぞ。

船頭「船棹だにも忘るゝは、風に出船の習ひなり。

ワキ「扨て此風は。

船頭「こちの風。

ワキ「向うて西に爲さうぞえい。

船頭「あら忌はしや聞かじとて、なほ此船を押して行く。

ワキ「暫しと言へど。

船頭「音もせず。

地「船は波間に遠ざかれば、追手は跡に近づきたり。

ワキ「あら笑止や、賴みたる船は遠ざかる。追手は跡に近づく、扨て御命は何と仕り候べき、某屹度案じ出だしたる事の候、此年月三熊野の權現へ歩みを運びしも、かやうの爲にてこそ候へ、かたじけなくも三熊野を海上に勸請申し、ならびに不動明王の索にかけて、あの船をふたゝび祈り寄せ乘せ申さうずるにて候、

やあ〳〵其船戻せとこそ、戻さずば明王のさつくにかけて祈り戻さうずるぞ。

船頭「何此の船を祈り戻さうとや。

ワキ「中々の事。

船頭「山伏は物の怪などこそ祈れ、船祈りたる山伏は未だ聞かぬよ。

ワキ「いや其船よせずして悔むな男。

地「臺嶺の雲を凌ぎ〳〵、年々の功を積むこと一千餘日、屢身命を捨て、熊野權現に賴みを掛けば、などか驗のなかるべき、一矜羯羅、二制多伽、三に倶利伽羅、七大八大金剛童子、東方。

地「そも〳〵我朝に靈神跡を垂れ給ひて、威光も神德も、區々なりと申せども、熊野の權現の誓ぞ勝れたまへる。不思議や東の風變り、西吹く風となる事は、如何なる謂はれなるらん。

シテ「本宮證誠殿阿彌陀如來の誓ひにて、西吹く風となし給ひて、船をとゞめ給へり。

地「扨て又西の風もやみ、こちの風となることは。

シテ「新宮藥師如來の、淨瑠璃淨土は東にて、こち吹く風となし給ふ。

地「扨て又飛龍權現は。

シテ「波路に飛んで影向す。

地「瀧本の千手觀音は。

シテ「二十八部衆の風變船を早めたり。

太平說阿新殿の事中の船戻傳說に就いて　（飯田　豐）

地「扨て、飛行夜叉は。

シテ「不動明王の。

地「さつくの船につけて、萬里の蒼波を片時が程に、若狹の浦に引き付けて、それより都に歸し給ふ、實に有り難き三熊野の誓ひの末こそめでたけれ。

といふのである。この詞章は宇治拾遺物語や太平記などの詞章に比較すると、更に複雜になり空想的になつて居る。しかも謠ふに舞ふに適するやうになつて居るから、この謠曲文を直ちに太平記等の文と比較して甲乙をつけることは不可能である。一體謠曲「絃上」の切りなどでも理窟的に、その詞章を彼れ此れ批評する人があるけれども、謠曲の切りなどは殊に空想的に理窟に陷らずに筆を走らせてあるのが上乘なものである。そこに聽衆觀察に一種の力を感じさせるのである。

前述したやうに、宇治拾遺物語の山伏船祈返事の傳說は越前地方に行はれた傳說であらうけれども、これが宇治拾遺物語から太平記に入つたのでないとしても、この宇治拾遺物語に入り曾つて國民の興味を引いた傳說が太平記に入り、檀風にも入つたのである。この船戻しの傳說は更に謠曲「船戻」にも取り入れられその謠曲の曲名まで「船戻」となつて居る所から見ても、如何にかゝる傳說が過去の我國民の興味を引いたかを知り得るのである。この謠曲「船戻」は今は各流共に誤つて居ないから左に梗概を掲げて見る。

「船戻」の梗概

落ちぶれた都の人が、妻子を連れて東國の田舍住居をするために、逢坂關を越え、鳰の海を眺めてやがて石山寺まで旅をして來た。そして妻子を連れて行けばよかつたのに、疲れた妻子を湖邊に待たせて、自分一人參詣に行つてしまつた。そこに二人の人買が姿をあらはして、これを誘拐しようと思つて、言葉巧みに同情して、自分達の船に乘せて對岸につれて行かうと申出した。都人の妻は、待つ人がある旨を答へてこれを拒絶した。人買は、欺き難きを見てとつて、日の暮れてからは、土地の習慣として、女子供は船に乘せぬといふことを地頭より觸れてあると欺いた。都人の妻は當惑してしまつた。人買の言葉も擧動も次第に荒くなつて、待人ありといふ女の言葉も耳にかけず、無理に船に乘せて漕ぎだしてしまつた。參詣を終つた都人は湖邊に殘した妻子の居らぬのに驚いて里人に尋ねて人買に誘拐されたことを始めて知り、殘念がつたけれども追ひ行くべき船も無かつた。そこに都一見の山伏が二人來て、行力によつて船を祈り戻した。山伏の一人は人買の振舞を憤つて訴へようとする。都人は妻子の助かつた喜びによつて、人買の罪を許すやうに山伏に賴んだ。今一人の山伏はこれに同意して、人買の罪を宥し、人買は悔悟し、再びこのやうな惡事をしないことを誓つた。山伏は皆の人々を對岸に渡すやうに人買に命じ、人買は尙も酒樽を持つて來て人々に酒をすゝめ、山伏は舞をまひ、やがて船に乘つて一同めでたく出達するといふのである。

この「船戻」の謠曲は同じく謠曲の「檀風」から出たことは確かである。それは、船を祈り戻す部分の他の部分について見ても、謠曲「自然居士」の人買傳說と同じく場所を近江の琵琶湖に採つて居ることや、その切りの部分の人買が酒を持つて來、山伏が近年の舞を舞ふあたりは同じく謠曲「安宅」に於て、關守が酒を持つて來、辨慶が延年の舞を舞ふ所と一致した所がある。而して「檀風」の方は世阿彌の作であり船戻の方は德川時代に出來た謠曲

である。これ等の諸點から見ても同じ傳說を含んだ「船戻」の謠曲は「檀風」の影響を受けて居ることは明らかである。

偖て、この山伏が船を祈り戻すといふ傳說は、比較的純粹に傳つて居る宇治拾遺物語に出て居る話によつて、恐らく越前地方にあつた傳說であつたらう。そしてかゝる種類の傳說が當時の國民に喜ばれたので、太平記の作者小嶋法師の手によつて他の物語と結びつけられたのではなからうか、又謠曲作者として非凡な手腕を持つて居た結崎世阿彌元淸が謠曲「檀風」に於て山伏の船を祈り戻す所を主要な部分とし、又德川時代に出來た「船戻」の謠曲の如きその曲名まで船戻とした所はこの船戻の傳說が當時の人々に喜ばれた傳說であることを示すと共に、これを不自然に見えぬやうに他の物語に結びつけた軍記作者としての小嶋法師の手腕も大である。そして太平記は勿論純然たる歷史書ではないがその史的價値の大であることはいふまでもないのであるから、國文に現れた他の傳說等を次第に除いて見ることによつてそこに比較的正しい史的事實が殘されるのではあるまいか。

又、謠曲「檀風」は太平記から出たとも見られるが、宇治拾遺物語の中に載せられて居る他の物語も謠曲に丁度、宇治拾遺物語中の「山伏船祈返事」と謠曲「檀風」に於ける差と同じ位の差で作られたのがあることを附言して置く、それは彼の宇治拾遺物語に、唐通ひの商人が虎と鰐との戰を見る話があるが、これと謠曲「龍虎」の筋との差の如きは好箇の一例である。